

未来へかける

～地域共育のこども園～

コンセプト

TVや本、インターネットで見たり聞いたりして、わかったつもりになっていても、そのような知識は活かすことができない。本当の学びとは直接見たり、触ったり、聞いたり、五感で刺激を受けて、心が動かされる体験をして身につくものではない。子どもたちの成長には自然の中での原体験が欠かせないと考え、小さな森の中のような公園のあるこども園を提案する。四季により様々な姿を見せる花や実、傾斜のある山や生き物の住むビオトープ、落ち葉や木の枝など身の周りの自然環境は子どもたちの感性を刺激するだけでなく、豊かな創造力で遊び道具や探求する題材に変わる。自然の中で子どもたちが自ら発見し、遊び方を考え工夫し、仲間と共にルールを作り、遊びをより深めていく。遊び方の説明書のない自然の中では、創造力でたくさんの遊びが生まれる。自然の中での小さな冒険を通し、1を工夫して10に変えるだけでなく、0から1を創り出す力も身につけることができると考えている。

3つの「カケル」

①声を「かける」-地域の人との交流-

外側に散歩道を作り、園庭の中を見渡せるようにすることで、地域全体が丸となって子供たちを見守る環境を整える。散歩道を歩きながら、地域の人々が子供たちに優しく声をかける場面が増え、自然と交流が生まれる。



②高低差のある敷地を「駆ける」-身体性の向上-

高低差のある敷地を駆けることで、子どもたちのさまざまな身体性が引き出される。さらに、友達と一緒に駆け回ること、協力し合い、互いに励まし合う場面が自然と生まれ、社会性や協調性も育まれる。駆けるという行為は、単なる運動以上の豊かな学びと成長の機会を提供する。



③「描ける」建築 -土の循環-

土は子どもたちにとって、自由度の高い遊びの材料となる。また、子どもたちの塗り遊びがメンテナンスの一環となり、刷れた土は園庭に戻すことで循環が生まれる。これにより、子どもたちは自然と触れ合いながら多くの学びを得ることができる。



植物、子供、地域の三角相互関係

これら3つの「かける」要素により、子どもたちが植物を育てることで、地域は豊かな自然の恩恵を受ける。植物が成長し、地域の景観や環境が豊かになる一方で、地域全体が子どもたちを温かく見守る役割を果たす。このようにして、植物、子ども、地域の三角相互関係が形成され、互いに支え合いながら成長していくサイクルが生まれる。この相互作用によって、子どもたちは自然とのふれあいを通じて学びと成長を得る一方で、地域全体も自然の持つ力を最大限に享受し、より強固なコミュニティが築かれることを期待する。



5つの教育理念

①自然から得られる感性や想像力

使い方が決まっている人工物と違い、何にでも見立てられる自然物を使って遊ぶことで「想像力」が育まれていく。季節によって変化する自然は、子どもたちにとってインスピレーションの宝庫となる。自然の中には、もちろん道具が無いので、子どもたちは自分で新しい遊びや想像の世界を自由に創り出して遊ぶことができる。

②幼少期の体験

自然の中で遊ぶことで、動物や植物、水や石や土などの自然物に直接触れ合う意味での「原体験」が得られる。幼少期に体験したこれらの経験は、将来大きくなった後の事物や事象の認識に影響を及ぼす大切な「原体験」となる。

③困難や様々な環境と向き合う力

子どもたちは、様々な感情を経験を通して、周りの世界に対して関わっていくこととする。「意欲」や「興味・関心」が高まっていく。通常の遊びは、楽しさや面白さを感じるのは当然だが、自然の中での遊びは「負の感情」や「不の感情」もおおずと体験する。現代は、危険や恐怖などの「負の体験」、「不快」、「不足」、「不潔」、「不便」から成る、4つの「不」が失われた時代であり、最も欠けている経験としてその重要さが指摘されている。自然の中での遊びを通して、あえてこのような経験をすることは、子どもが持っている本来の力を発揮させ様々な環境と向き合っていく力を育む。

④挑戦する気持ちや基礎体力

自然豊かな環境は、子どもたちの「挑戦する気持ち」を引き出し、そこから発展した様々な遊びを通して「体力」や「身のこなし」に良い影響を与える。身体を十分に動かす遊びや活動は、結果として基礎体力や身のこなしの能力が高まり、身体を動かす楽しさを感じる心が養われていく。

⑤友達との協働・協力する力やコミュニケーション能力

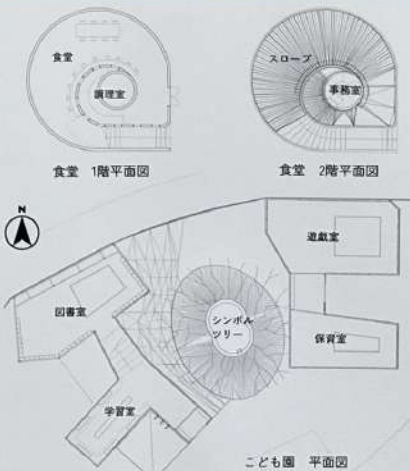
大きな自然相手に、小さな子ども同士で立ち向かうことで、「協働」、「協力」して遊ぶ態度や力が育まれていく。どのような保育環境においても、協働や協力の場面は見られるが、大人が介在せずとも、自然の中では身体レベルで協働する体験を促してくれる。

配置図・ゾーニング・動線計画



敷地の周囲にはランニング・ウォーキングコースとして歩道を設け、その歩道から敷地内にアクセスするための入口を三ヶ所配置している。さらに、敷地の中心部に交差するように道を作り、その道を境にして施設ゾーン、活動ゾーン、交流ゾーンの三つのエリアに分けている。このゾーニングにより、利用者はそれぞれのエリアにおいて異なる活動を楽しむながらも、全体として一体感のある空間を感じることができるようになっている。

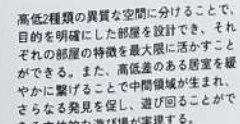
平面図



ポイント



建物の高さを子どもだけが入り込めるように床の高さを上げることで、子どもたちは自然と床下の世界に入り込めるようになる。この床下の空間は、子どもたちの秘密基地となり、子どもたちにとっての特別な場所として機能する。新たな発見や創造的な遊びを楽しむことができるこのスペースは、子どもたちの成長と学びの場となる。



高低2種類の異質な空間に分けることで、目的を明確にした部屋を設計でき、それぞれの部屋の特徴を最大限に活かすことができる。また、高低差のある居室を緩やかに繋げることで中間領域が生まれ、さらなる発見を促し、遊び回ることができる立体的な遊び場が実現する。



食堂の1階から上へ上がる階段に子ども目線にあわせた小さい窓を設け、中で調理している様子を覗くことができる。子どもたちにとって、自分の目で見て観察し、自分たちが食べるものがどのように作られるのかを知ることは、食べ物に対する感謝の気持ちを育むことにも繋がるかもしれない。

青年期を駆け抜ける

～若者の自殺を減らす建築～

【要旨】

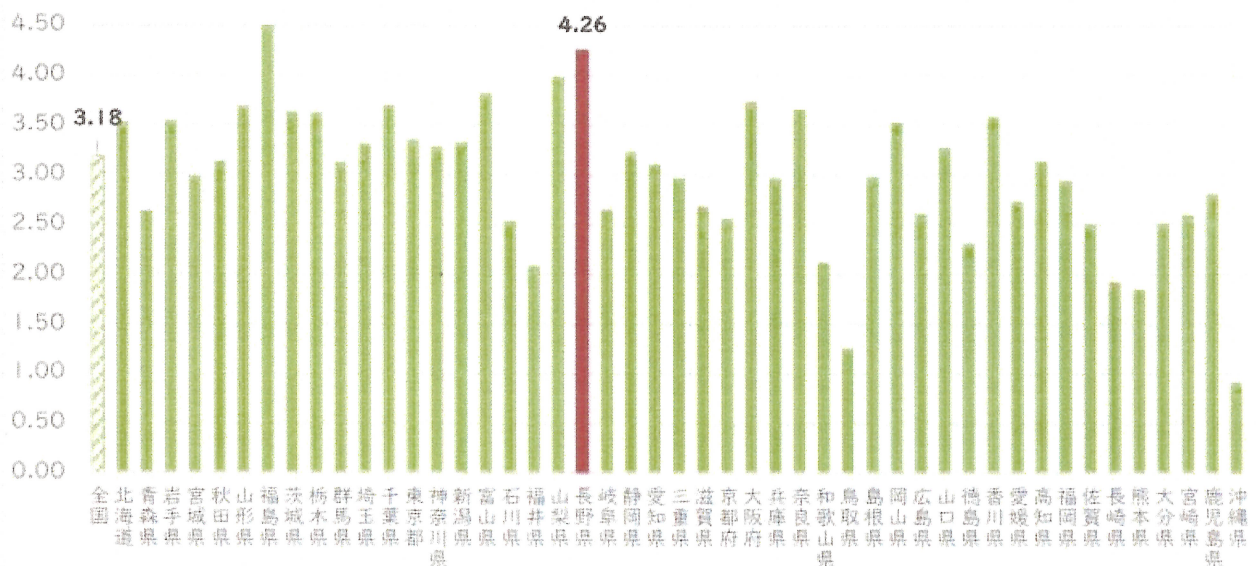
本研究では、若者の自殺という社会的課題に焦点を当て、建築の視点から解決策を提案することを目的とした。まず、「自殺予防」と「建築」をキーワードとした文献調査を行い、若者の自殺を減らしうる建築について3つの要因を見出した。次に、高校生104名を対象に、高校生が抱える悩みと相談相手についてアンケート調査によってその実態を明らかにした。そこから、「学業」や「進路」に関する悩みの高さに関連し、学生にとっての学習環境整備の必要性、世代を超えたつながりによる見守りの機能、そしてコンビニエンスストアよりも数の多い寺院の存在などに注目し、学生の学習空間として寺院を開放することの提案に至った。

I 問題と目的

「カケル建築」を提案するうえで、私はまずその建築物の意義を明確にするため、社会の問題点について考えることにした。身近な課題であれば吟味や独自の研究を行いやすいと考えたため、私の住む長野県の課題について調べることにした。表1は、全国における都道府県別未成年者(20歳未満)の自殺死亡率比較(平成29年～令和3年平均)である(長野県,2024)。長野県は、私自身と同年代である若者の自殺率はこのデータにおいて全国二番目の高さであり、全国と比べ非常に高い水準であることが示唆されている。長野県は、第4次自殺対策推進計画の中で2027年度までの自殺対策の骨子案を示すなど、この問題を深刻に捉えていることも示されていた。

表1 都道府県別未成年者(20歳未満)の自殺死亡率比較(平成29年～令和3年平均)

(自殺者数：厚生労働省「人口動態統計」、人口：総務省「人口推計」)



以上より、私は「どんな建築が自殺を減らすことに繋がるのか？」を研究の軸に調査を進めていくことにした。よって本研究では、若者の自殺という社会的課題に焦点を当て、具体的な事例、調査より「建築の視点」から解決策を提案することを目的とする。

II 方法

1. 文献調査

「自殺予防」「建築」のキーワードでインターネット検索を行い、抽出された文献について、若者の自殺を減らしうる要因の視点から検討することとした。

2. アンケート調査

若者の自殺予防のための建築を提案するうえで、若者を自殺へと追い込む背景にある、若者の悩みや相談の実態を明らかにすることが必要であると考えた。そこで、高校生を対象としたアンケート調査を実施することとした。

2.1 調査対象者

調査対象者は、長野県に居住する高校生 104 名（男 53 名、女 45 名、回答しない 6 名）で、平均年齢は、16.7 歳であった。

2.2 調査内容

- (1) デモグラフィック項目として学年、年齢、性別について回答を求めた。
- (2) 高校生になってから感じたことのある悩みについて、「学業」「進路」「友人関係（先輩・後輩関係を含む）」「恋愛関係」「家庭的問題」「経済的問題」「健康的問題」「その他（自由記述）」について選択式（複数回答可）で回答を求めた。
- (3) 悩みを抱えた際の相談相手について、「友人（先輩・後輩を含む）」「兄弟姉妹」「親・祖父母」「先生」「インターネット上の友人」「地域の人」「スクールカウンセラーなどの専門家」「相談しない」「その他（自由記述）」について選択式（複数回答可）で回答を求めた。

2.3 調査方法

調査対象者へ調査フォームへのリンク URL を送信して配布した。調査内容は Google Forms によって作成しインターネット上に公開した。縁故法により実施し、特定の地域や特定の高校、特定の学科などの偏りが生じないように配慮した。

2.4 調査時期

2024 年 10 月

2.5 倫理的配慮

本調査において、研究概要、研究参加に関わる権利事項、研究成果の公表、個人情報保護等に関する説明を行った後、同意が得られた者に対して実施した。また、調査への参加は自由意志によるものである。

III 結果

1. 文献調査

岡(2013)は、自殺を減らすまちの特色を明らかにするために、日本で「最も自殺の少ない町」をフィ

ールドに 3 年間に渡る調査を進め、その中で、自殺の危険を抑制するコミュニティの特性と住民気質について説明し、特徴的な住民気質の形成に寄与したと考えられる町の歴史と自然条件について考察している。岡（2013）の知見から、若者の自殺を減らしうる要因として大きく3つの要点を整理し活用することとした。

（1）日常生活での空間に存在すること

相談窓口という「アウェイ」に呼び出すのではなく、日常生活の「ホーム」という空間で「軽い悩み」を相談することを習慣化することによって問題を解決する手助けになる。

（2）本人が自発的と取れるアイデア

相談が無意識・無自覚のうちに自然と行われることが重要である。

（3）「停留」を意識したもの

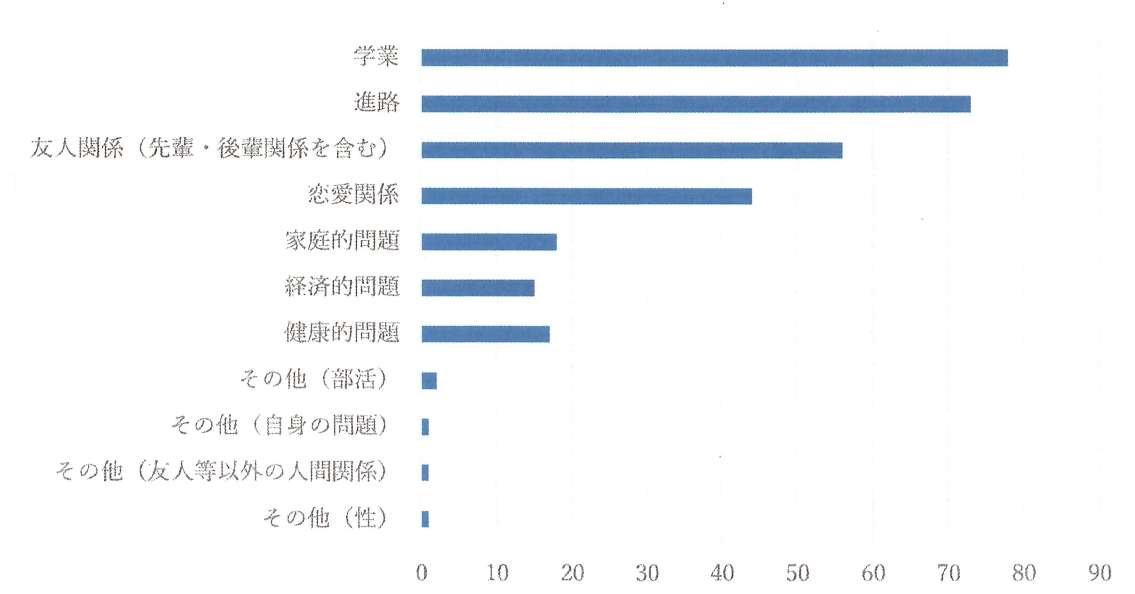
人々の停留はおのずと談笑の場となり自殺の少ない町をつくりあげていた。

2. アンケート調査

2.1 悩みの内容

自殺の要因となる“悩み”において、高校生はどのようなことで悩むのかを調査した。その結果、全体の75%の人が学業のことで悩んだことがあり、次いで進路についても70%ほどの人が悩んだことがあった（表2）。この2項目は、他の項目と比べてその割合が高く、高校生の悩みとなりやすいことが示唆された。

表2 高校生になってから感じたことのある悩み（N=104,複数回答）



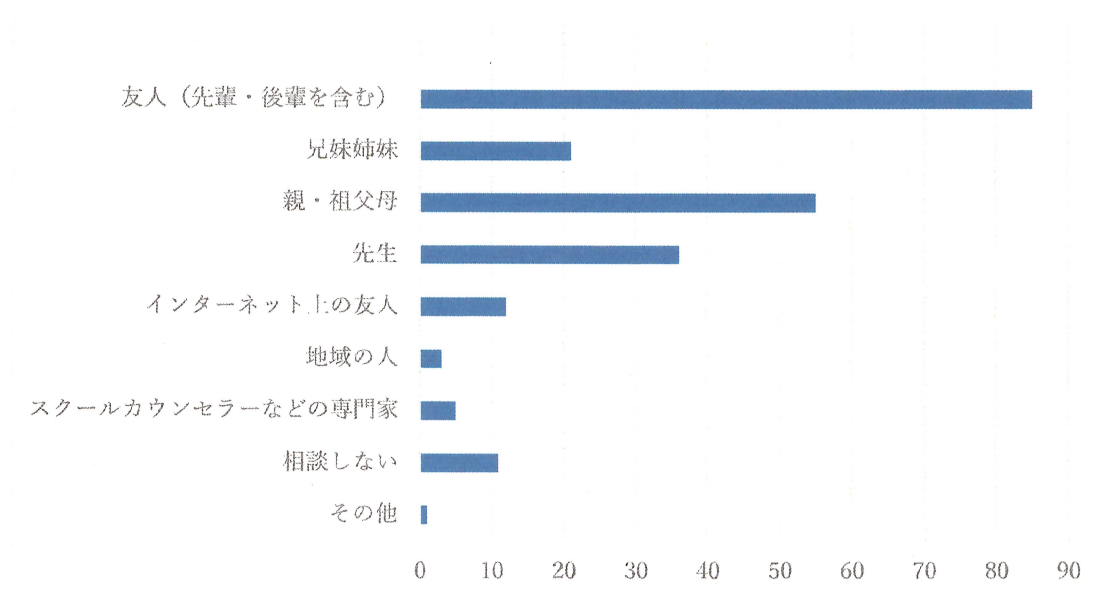
2.2 悩みを抱えた際の相談相手

高校生は悩みを抱えた際誰に相談するのか、または相談する相手が居るのかどうかを知るために相談相手についてもアンケート調査を行った。

友達に相談する人が80%以上であり、他の項目に比べて高い結果となったが、次いで親族や先生などの自身より上の年代の人を相談相手にすることも多く、異なる世代の相談相手の需要は決して低くないことがわかった。

文献調査で参考にした研究結果とは異なり、地域の人を相談相手になることは少なく、3%にも満たなかった。また、相談をしないと回答した人が10%を上回る結果となった（表3）。

表3 悩みを抱えた際の相談相手（N=104,複数回答）



IV 考察

文献調査から見いだした“日常生活での空間に存在すること”という条件は、一か所に課題解決のための建築を建てるのではなく、規模は小さくとも広範囲に分散していることで満たすことができる。また、“本人が自発的と取れるアイデア”については、別の目的で今回提案する建築物に足を運ぶなかで、あくまでも“ついで”という感覚で自身の悩みを打ち明けられる場を提供することで解決が可能であると考えられる。それに伴い、“「停留」を意識したもの”という観点も、そこを訪れる目的があればおのずと停留は起きるのではないかと思う。

アンケート調査から、学業や進路といった勉強に関することは、多くの高校生が悩みとして抱えたことのある事例だということが分かった。今回の回答は、高校2年生の回答が全体の80%を占めていたため、受験期である高校3年生のみを対象とした際には、学業や進路の悩みはさらに高い割合になることも推察される。文部科学省（2024）による、高校生の自殺の原因・動機に関するデータにおいても、学校問題に関するものが高く、特にその中でも学業不振が最も高く、次いで進路に関する悩みが高いという結果が示されており、今回の調査に重なるものである。

つまり、高校生の学業や進路に関する事象における課題を少しでも解消することが、自殺を減らすことにつながるのではないかと考える。普段、ショッピングモールのフードコートなど、本来は買い物客

が休憩する場所として設置されている空間を学習空間として活用している学生を見かける。騒がしく、とても勉強に適しているとは言えないであろう空間で学習をする学生たちは、塾などの自習室が飽和状態、あるいは地理的に不便などの理由から、ある程度劣悪な環境でも仕方なくその場を学習空間として利用しているのではないかと推察する。あくまで主観ではあるが、彼らはより良い学習環境を求めているように感じられた。そして、悩みにつながりやすい学業に向き合っている場面を見守られている空間で勉強することができるようになれば、SOS をキャッチしてもらいやすくなったり、SOS になるよりも前に話せる場になってきたりする可能性が出てくるのではないかと考える。岡（2020）が述べているように、監視ではなく関心をもって見守られる場が、高校生にとっても必要なのではないだろうか。”地域の人“との交流を育める空間を提供し、地域の人が高校生の悩みを聞く相談相手になれる、もしくは見守れるような環境を整えることは有意義である。

V 建築の提案

1. 具体的な建築

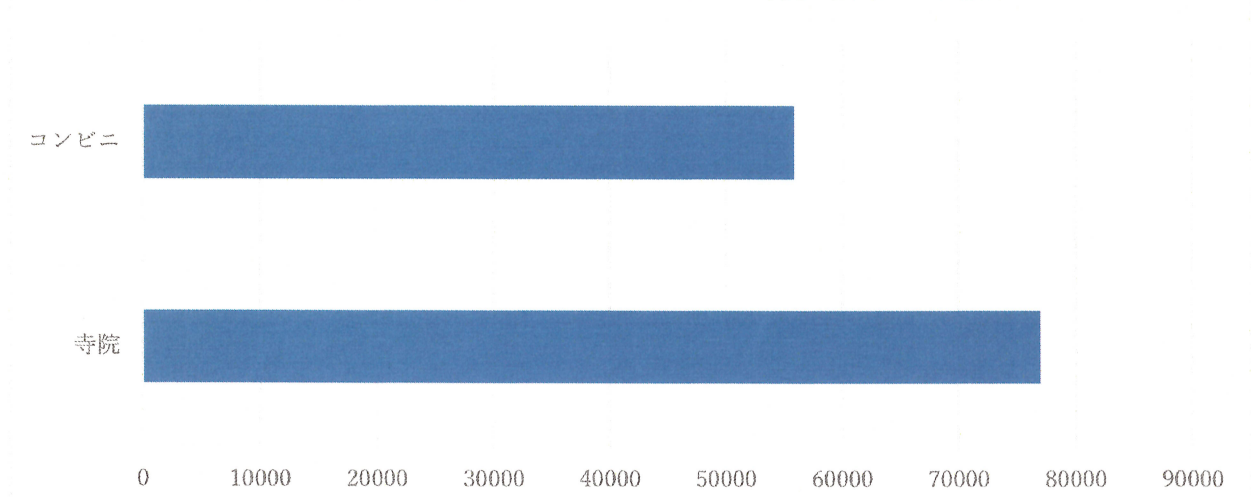
ここまでの調査から、私は「カケル建築」として『寺』を学習空間として開放することを4つの理由とともに提案する。

理由①「数の多さ」

地域に自らの居場所をつくる架け橋として、数が多く身近に存在していることは重要であると考えた。

仏教系の宗教法人数は、全国で7万6701法人（文化庁，2024）であるのに対し、全国のコンビニの数は5万5709店（日本フランチャイズチェーン協会，2024）であり、寺院はコンビニエンスストアよりも数が多いことがわかる（表4）。このことから、寺は日本各地の広範囲に分散しており、高校生が日常生活する範囲の中に存在している空間だといえる。また、数が多いということは寺を居場所として確保することは容易であると考ええる。

表4 日本におけるコンビニエンスストアと寺院の数（グラフは自作）



理由②「役割」

過去、「駆け込み寺」として結婚した女性を救済する場があったように、現代においては悩みを抱えている人を受け入れる意味で「駆け込み寺」という新たな役割を果たせるのではないかと思う。また、寺は「寺子屋」という役割が存在していたことから学生の居場所として活用することは有意義だと考える。また、実際に社会貢献活動をしているお寺が紹介されているインターネットサイトも存在し、すでに地域の人々の居場所につながる活動が寺という場で行われている事例が存在した。

理由③「世代を超える繋がり」

40歳から69歳までの全国の男女566名のうち、昨年1年間に寺院を訪問した人は全体の76.9%おり、ほとんどの人はお寺を訪れていた（小谷，2009）。このように寺院は、世代間の架け橋ともなることができると考える。若者にとって、同世代には相談しづらいことも年の離れた人になら相談できる場合がある。また、人の出入りが多いことは交流を生み、人同士の架け橋になると考える。これにより、地域の人を相談相手とし助けを得ることができる。

理由④「学生の停留」

IV考察で記述したように、学生がこの建築物に足を運ぶ目的があるべきである。とても勉強に適しているとは言えないであろう空間で学習をする高校生に、彼らが交通費や時間といった手間をかけることなく行くことのできる学習空間を提供するべきだと考える。また、アンケート調査の結果にもあるように勉強に関連することが学生の悩みになりやすい。寺を塾の自習室のように活用することができれば彼らは学習空間のストレスを減らせ、結果として勉強関連の悩みの軽減にも役立つと考える。未成年者の多くは学生であり、学生を救えることは結果的に若者の自殺を減らすことになる。

2. インタビュー調査

今回の建築の提案内容について、寺はどのようにとらえるのかについて明らかにすることが必要であると考える、寺に関わる人にインタビュー調査を実施することとした。

2.1 方法

2.1.1 調査対象者

長野県内にある宗派の異なる2つの寺を対象に、それぞれ立場の異なる人をインタビュー対象者とした。内訳は、住職（男1名）、坊主（女1名）の2名であった。

2.1.2 調査内容

- （1）寺を学習空間として開放することをどう考えるか。
- （2）その環境は、若者を見守るという機能において有効であるか。

2.1.3 調査時期

2024年10月

2.1.4 倫理的配慮

本調査において、研究概要、研究参加に関わる権利事項、研究成果の公表、個人情報保護等に関する説明を行った後、同意を得て実施した。また、調査への参加は自由意志によるものである。

2.2 結果

（1）住職

今の日本では、お寺＝法事・葬式をする場、僧侶＝お経を読む人といった認識が強いが、葬儀の際

には故人を浄土に導く役割とともに、遺族が健全に生きる希望を持てるようにすることも意識している。また、亡くなった方に対してより、今を生きる方に対して何ができるのかを模索することは「より善く生きる」（七仏通戒偈）の言葉が表すように、日本に仏教が伝わって以来のテーマである。そういった意味合いでも、提案内容には「賛成」である。「お寺をつかっていただける」環境を整えていければと思う。

（2）坊守

寺を学習空間として開放することについては、過去、寺子屋としてのお寺の存在は理想的であったと思う。お寺としては、要望があれば受け入れると思う。

若者を見守るという機能において有効であるかについては、お寺側としては受け入れる気持ちがあると思う。場所として、お寺が落ち着く場所になるならば、とてもうれしいことだと思う。

2.3 考察

両者ともに寺を学習空間として開放することに肯定的であったことから、現在の用途（主にお通夜や葬儀など）以外でも、寺が若者に活用されていくことは可能であると考え。また、お二人とも悩みを抱えている人に対しても前向きな返答であり、若者を見守ることのできる場としてお寺を活用したときに、見守ってくれる人が少なからず存在するということが分かった。

VI 総合考察

「カケル」というテーマに対し、“駆け込み寺”や“架け橋”といった観点から具体的な建築として「寺」を提案内容とした。

今回の私の提案は0から何か新しい建築物を生み出すようなものではないが、すでに存在している建築物に新しい意味を持たせることは“創造”と言え、その建築物が何かしらの需要に対して新たな供給を生むことで、結果として新しい“建築”であると考え。

今回は、長野県の課題であった“若者の自殺”に焦点を当てて調査・探求を進めてきたが、“若者の自殺”は全国的に見ても喫緊の課題であり、実際にインターネットなどを利用して検索をすると様々な資料や対策案などがとても多く存在しているように感じた。そういった日本の現状に対しても、今回の自身のテーマを“若者の自殺”としたことはとても意義のあることだったように思える。

今ある“若者の自殺”という大きな課題に対して、本研究は、“建築”といった他にあまり例のない視点から考察してきた。本研究が、この課題の解決の一助となることを願う。

引用・参考文献

文化庁 2024 令和5年宗教統計調査

一般社団法人日本フランチャイズチェーン協会 2024 JFA コンビニエンスストア統計調査月報
2024年9月度. (<https://www.jfa-fc.or.jp/particle/320.html>)

小谷みどり 2009 寺院とのかかわり~寺院の今日的役割とは LifeDesign REPORT Autum, 株式会社
第一生命経済研究所 (<https://www.dlri.co.jp/pdf/ld/01-14/notes0910a.pdf>)

長野県 2024 第4次長野県自殺対策推進計画~「誰も自殺に追い込まれることのない信州」を目指して~ (<https://www.pref.nagano.lg.jp/hoken-shippei/documents/zentai.pdf>)

岡 檀 2012 日本の自殺希少地域における自殺予防因子の研究 ヘルスリサーチフォーラム（ヘルス

リサーチフォーラム及び研究助成金贈呈式講演録)

岡 檀 2013 生き心地の良い町ーこの自殺率の低さには理由(わけ)がある 講談社

岡 檀 2020 シンポジウム自殺と社会 自殺希少地域・海部町の「つながりつつも縛らない」という
選択ー関心と監視の違いに着目してー 自殺予防と危機介入, 40 (1), pp.79-83.

岡 檀 2021 自殺希少地域の研究から得られた気づき 人間行動科学を取り入れた対策の重要性と有
効性 社会技術研究開発センターオンラインセミナー資料
(https://www.jst.go.to/ristex/info/files/02_2021seminar_oka.pdf)

時をカケル商店街

一歴史ある建築を未来に残す一

私が暮らしている由利本荘市では、歴史的な街並みを残している場所があります。それが本荘公園であり、大正時代に本荘城の跡地に整備されました。本荘公園周辺の住宅や店舗は、景観を崩さないよう昔ながらの街並みがのこっています。本荘公園や周辺の街並みを見て、次世代につながるような建築像が浮かび上がりました。

IoTやAIなどの先端技術が進歩し、持続可能で快適な建築空間をスマートに提供できるようになっている中で、歴史的な街並みを保護しつつ現代的な商業活動や移住空間を導入することで、再開発が促進され、新たなビジネスや居住者を引き付けることができると思いました。また、昔の建物は、自然素材やパッシブデザイン（自然光や風をうまく取り入れる設計）を活用していることが多く、現代のエコ技術と組み合わせることで、エネルギー効率の良い空間づくりが可能になると思いました。

以上の思いから、歴史ある建物を現在、未来に残す架け橋のような建築物を計画したいと考えました。

現在は「少子高齢化」や「過疎化」が深刻な問題となっています。少子高齢化や過疎化が進んでいくことで、地域の経済や文化が衰退していきます。若者の都市部への流出によって、地方の活力が失われつつあります。

文化的価値と現代的な機能性を掛け合わせた次世代商店街「時をかける商店街」にいらっしやい。

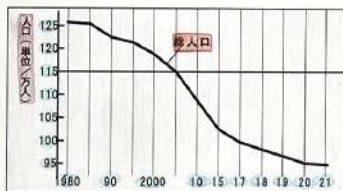
そこで、地域の活気を取り戻し、人々が集いコミュニケーションを広げることができる「時をカケル商店街」を提案します。



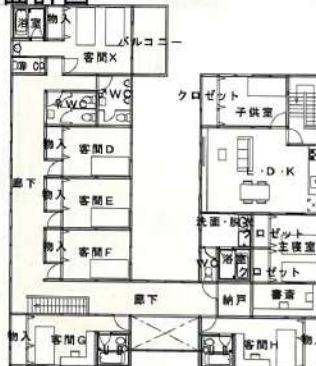
南側立面図 S=1: 100

1. 現在の社会問題

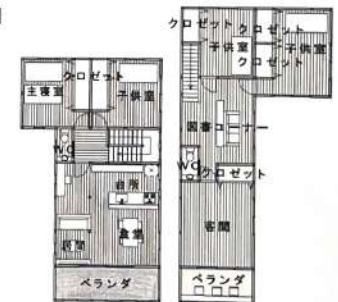
今回私は、出身地である秋田県に絞って調査を行いました。現在の秋田県が抱える社会問題には、特に少子高齢化と人口減少が深刻です。秋田県は日本全国でも人口減少率が最も高い地域の一つであり、出生率の低下と若者の都市部への流出が課題となっています。これにより、地域社会の活力が低下し、高齢者の進む一方で、労働力不足も顕在化しています。また、地域経済の低迷や、賃金水準の向上の必要性も重要な問題とされています。そこで、秋田県は地方創生に向けて、若者のUターンやIターンを促進する取り組みを進めています。その取り組みの案として、「時をカケル商店街」を計画し設計しました。



4. 平面計画

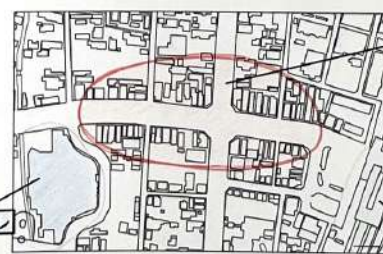


商店街の中に、伝統的な日本庭園や茶室を設置し、地域の人だけでなく訪問者が日々のストレスから解放されるような癒し空間を提供します。



2 階平面図 S=1: 200

2. 計画する区域



交通の便や地域の経済活性化、地域コミュニティの形成を考え駅前商店街を計画します。

秋田県由利本荘市駅前周辺 S=1/500

駅

3. 次世代商店街

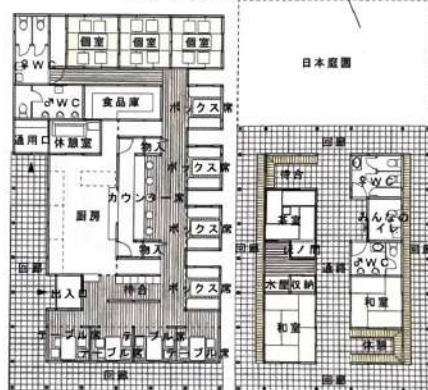
商店街を昔風にアレンジするので、伝統的な町家の美しさをデザインに取り入れました。ノスタルジックで魅力的な商業空間を実現でき、坪庭や格子窓など町家の特徴を多く取り入れました。



溝縁でコミュニケーションがとれる



歴史的な街並みを散策できる



1 階平面図 S=1: 200

